空間・社会・地理思想 14 号，17-29 頁，2011 年
Space, Society and Geographical Thought

棚橋源太郎の博物館論と郷土の具体化

福田　珠己 *

Tamami Fukuda

Gentaro Tanahashi's museum thoughts and the embodiment of "kyodo"

Ⅰ　はじめに

棚橋源太郎 (1869-1961) は日本の博物館史を語る上で, 避けて通ることのできない重要な人物である。明治，大正，昭和と長きにわたって，教育および博物館の分野で指導的な位置にあり続け，今日の博物館の基盤を築いたのである。そのことは，1990 年から 1991 年にかけて編集された『博物館基本文献集』（伊藤 1990-1991）の構成からもわかる。別巻を除く 21 巻のうち，7 巻で棚橋の著作が復刻されたのである。20 世紀末，日本の博物館がたどってきた道程を振り返った時，棚橋源太郎は，中心に位置する巨人であったといえよう [1)]。

このような人物，あるいは，その実践や思想については，教育学や博物館学など多様な視角から論じられてきた。理科や郷土科を中心とした学校教育，社会教育・生活改善運動，赤十字の活動，博物館における実践など，棚橋の多岐にわたる活動は，決して，単一の学問分野のなかで論じられるようなものではないからである。例えば，日本の博物館史を詳細に論じるなかで，棚橋の思想や実践に言及した椎名 (1978, 1981)，博物館に関連した諸活動のなかでも，とくに，教育博物館や教育思想に焦点をあてた佐藤 (1998, 2009) や福井 (2004, 2006a, 2006b, 2007)，こども博物館という点から棚橋を位置づけた福田ふみ (2007) らの研究は，博物館における棚橋の多彩な活動を明らかにしてきた。また，学校教育に関係する思索・実践について，内川 (2004) は東京高等師範学校で講義を行ったエリザベス・フィリップス・ヒューズ (Elizabeth Phillips Hughes[2)]) が棚橋に及ぼした影響に注目し，斎藤 (1998) は博物館論の受容と学校教育について論じた。さらに，各教科に目を転じると，理科教育や教授法について論じた宮脇 (1996) や岩崎 (2000) の研究のほか，手工教育に着目した石田と小出の一連の研究 (石田・小出 1998a,1998b,1999; 小出・石田 1998) があげられる。本稿で取り上げる郷土科教育，あるいは，郷土博物館についても，博物館学や教育学の視点からなされた研究は多い (内川 1990, 1994; 岩崎 2000; 木村 2000; 生島 2006; 内山 2007)。

本稿の視点は，これら先行研究と重複するところも多い。また，これら研究に見られない新たな資料を発掘する画期的な報告というわけでもない。むしろ，地理思想研究の視点から，「郷土」を問題の中心に据え，棚橋源太郎の思想・実践を再解釈することに重点をおくものである。そのような作業は,「棚橋源太郎論」にささやかではあるが新たな切り口を提示することにもなろう。

Ⅱ　研究の視角

(1) 地理思想としての郷土

多様な視角から注目され研究されてきたこととは対照的に，棚橋源太郎は地理学史上にその姿を現すことのない存在である。それどころか，地理学研究者がしばしば関与してきた郷土や郷土教育に関する研究のなかでも，それほど重要視されてこなかったといえよう。明治 19 年の「小学校ノ学科及其程度」をめぐる島津 (2010) の論考では，棚橋の『尋常小学に於ける実科教授法』に言及し，また，「郷土科」という訳語にも注目しているが，そのような例はごく少数である。例えば，昭和初期の郷土教育運動について論じた伊藤 (1998) の詳細な研究においても棚橋の姿は見られない。後述するように, その当時, 棚橋の活動の舞台が完全に学校から博物館に移行し

*　大阪府立大学人間社会学部

ていたこと，したがって，棚橋の代表作ともいえる『郷土博物館』がその頃に出版されていたとはいえ，学校教育にのみ限定して郷土教育を論じた場合，彼の論考が俎上に載せられなかったことは，容易に推察できよう。また，明治後期から，郷土科教育の実践に尽力してきたにもかかわらず，棚橋の理科教育指導者としての位置づけや，社会教育や博物館の世界における輝かしいキャリアが邪魔をし，社会科教育や地理教育との関連の中で郷土教育を論じた際，棚橋の存在に光が当てられることがなかったということもできよう。

しかしながら，実際は，近代日本における郷土の実践・具体化という点において，棚橋源太郎は常に重要な位置に居続けたのである。棚橋は郷土をどのように位置づけ，教育や博物館活動になかで具体化したのだろうか。ここでいう郷土とは，むろん，自明で自然な概念ではない。現代日本社会においてごくありふれたものとして使用されているが，その用法を一覧すると，郷土という語のもつ問題は複雑なものである。とりわけ，その表象を近代日本の地理的想像力の問題として考えると，より複雑である。つまり，郷土は自然なものと受け取られている一方で，近代国民国家形成と連動する形で，策定され具体化されてきたことこそが，近年，問われているのである（「郷土」研究会 2003）。棚橋は，このような郷土という思想に，その時々の社会的状況下で直面し，異なったフィールドで具体化してきたのである。したがって，棚橋の郷土観を研究することは，郷土という地理的想像力のあり様，また，郷土という範域のもつ政治性の探求を可能にするのである。

一方，棚橋が生涯にわたって力を注いだ博物館という装置もまた，近代日本社会において重要な役割を果たしてきた（金子 2001；椎名 1989）。博覧会と並んで，近代的なるもの，西洋的なるものとして多様な回路をへて日本に導入された博物館もまた，時代によって異なる位置づけがなされたものである。とりわけ，「民衆の啓蒙」装置として役割は注目に値する。そのような「民衆の啓蒙」装置である博物館では，事物が機械的に空間の中に配列されているだけではない。博物館という表象は，常に啓蒙すべき内容と関わりながら形成されているのである。そしてまた，ベネディクト・アンダーソンの議論に立ち返るまでもなく，そのような博物館における表現は「我々」の形成に密接にかかわるのである（福田 1997,2003）。

近代日本における地理的想像力と密接にかかわる郷土という思想と，事物を空間の中に配列することによって民衆を啓蒙する近代的装置である博物館，双方に深く関与し続けた棚橋源太郎に注目するのには，また別の理由がある。1942 年，日本博物館協会によって発行された報告書『郷土博物館建設に関する調査』（日本博物館協会 1942）を例としてあげよう。この調査には大学教員のほか，博物館関係者，文部省や東京市で役職につく者を含む 14 名の委員が関与し，「支那事変勃発以来郷土博物館建設に関する要望が高まり」，「建設運用上に関する諸問題調査の必要」を認め，審議を重ねてきたという。このような報告書を前にしたとき，「時局」を理由に，愛国心と連続したものとして愛郷土精神の養成を位置づけ，その基礎として郷土博物館の興隆を説明することは難しいことではない。郷土なる思想の展開と博物館という装置の結びつきについて，特定の時代における断面をとらえ，社会的政治的プロセスを探求することは十分に可能である。

けれども，ここで注目したいのは，14 名の中に，棚橋源太郎が日本博物館協会理事として加わっていたことである。報告書の記述内容を検討すると，一委員としての役割を超え，彼がこの調査において中心的な役割を果たしてきたことは明らかである。報告書は，「郷土博物館の本質」，「郷土博物館の重要性」，「郷土博物館の配置」，「郷土博物館の蒐集品」，「郷土博物館の事業」，「郷土博物館の建設設備」，「郷土博物館の設立管理及維持」の各章からなるが，その内容の多くが棚橋の著作と重複しているのである。つまり，郷土博物館に関する当時の理解を示すこの報告書は，棚橋源太郎の郷土博物館論を要約したものだということができるのである。

少々話がそれてしまったが，明治後期の初等教育における郷土科教育にはじまり，1942 年の戦時下の郷土博物館建設に至るまで，棚橋は，異なる状況下で異なるフィールドで郷土なるものにかかわり続けたのである。そのことが，郷土という地理思想と博物館という近代的装置の接合を，両者の結び目に位置する人物である棚橋源太郎を介して論じようという本稿の研究目的に直結するのである。また，郷土という地理的想像力，また，それが博物館の中で具体化される政治性を明らかにすることにも連なるのである。

（2）表象を越えて

郷土という地理思想を棚橋の実践を通して論じることは，近年の文化地理学研究の動向をみると，別の可能性も秘めている。それは，博物館という装置のもつ特徴によるところが大きい。博物館はメディ

アの一形態であると同時に，人，事物，思想などが出会い，関係し合うダイナミックな場である。当然，博物館は事物が配列された中立的な空間ではない。また，従来の研究が行ってきたように，イデオロギーの反映として位置づけ，一元的な読みを行うこともできない（Macdonald and Fyfe 1996）。人は展示室の中を移動し，身体を通して博物館という空間と関係を築いているのである。近年は，博物館をダイナミックな営みとして捉える研究も増加している（Macdonald 1997）。橋本（1998）が可能性を提示したパフォーマンス・アプローチもその一例である。橋本は，アメリカ民俗学において，主として広義の芸能に焦点を当てて転換されてきたこのアプローチを物質文化研究に適用することを提案したのである。そのような試みは，例えば，パフォーマンス・アプローチを野外博物館で展開し，そこでのコミュニケーションに注目したスノー（Snow 1993）やカトリエル（Katriel 1997）の研究にみることができる。

このような博物館の位置づけは，表象を超えた領域へと研究の関心を移行させつつある近年の文化地理学研究の変化と極めて近いところにある（福田 2010）。地理学研究のこの潮流を「非表象理論」と称することもできるが，そこに内包される問題の軸は単一ではない (Thrift 2007; Anderson and Harrison 2010)。物質性，行為遂行性，ポスト・ヒューマン，情動，異種混淆性など，多様なキーワードが見出される思想的潮流については，すでに，森 (2009) が展望しており，著者 (福田 2008) もホーム概念との関連において言及している。また，泉谷 (2003) は，地理学におけるポストモダニズム論争を論じた際に，いち早くその動向に注目していた。博物館，あるいは，博物館研究との関連からこの思想的潮流を見ると，思考における物質性に注意が払われていること，運動や流れに重点を置くこと，さらに，それが単純な知覚や認知，観察に基づく経験主義や素朴な物質への回帰とは異なるラディカルな経験主義であること，が特徴としてあげられる (Thrift 2007)。そしてまた，そのような試みは，現代美術におけるインスタレーション，博物館やヘリテージにおける物質文化の研究や実践とも関連するのである [3]。地理学研究者が関与した研究として，ヘリテージにおける人々の実践に注目したクラングの研究 (Crang 1996) や，トリア＝ケリーが考古学研究者とともに取り組んだ研究 (Nesbitt and Tolia-Kelly 2009; Witcher, Tolia-Kelly and Hingley 2010)，すなわち，考古学的遺物，テクストやイメージ，人工物，そして，ハドリアヌスの長城という景観というマテリアリティの三つの形態をめぐって，ハドリアヌスの長城の具体化について論じた研究・実践があげられよう。

本稿においても，同様の視点から，棚橋の博物館における実践を探求する。当然のことであるが，棚橋が生きた時代の博物館経験に直接アプローチし，生き生きと描き出すことは不可能である。そのことを了解したうえで，なお，博物館という空間，あるいは，そこにある事物にアプローチする切り口として，本稿では，展示空間の配置や技術的側面に注目する。一方では，棚橋が長きにわたって関わってきた郷土という地理思想を当時の社会的状況との関連のなかで解き明かしつつ，他方では，それらメッセージと人々との間を取り持った展示技術や視覚的な仕掛けについて検討することを目的とする。

III　棚橋源太郎の生涯 [4]

郷土という思想と教育や博物館の現場での具体化へと論を進める前に，棚橋源太郎という人物について説明しておく必要があろう。

棚橋源太郎は，1869（明治 2）年，美濃国方県郡木田村南柿ヶ瀬 (現, 岐阜市) で生まれた。1874 (明治 7）年，前年に創立された化成舎に入学，学制発布後，1876（明治 9）年からは北方小学校で学び，1883（明治 16）年高等科を卒業し，母校で授業生となる。さらに，1884（明治 17）年，岐阜県華陽学校師範部（後の岐阜県尋常師範学校）に入学，同校卒業後は，附属小学校の訓導となる。近代日本教育制度の幕開けと同時に学びはじめ，教職の道を歩みはじめたのである。1892(明治 25) 年，高等師範学校（1902 年に東京高等師範学校と改称）博物科入学，1895(明治 28) 年に卒業し，兵庫県尋常師範学校教諭兼訓導，岐阜県尋常師範学校教諭兼訓導を歴任する。後者は昆虫学者として著名な名和靖の後任である。また，1894-6 年頃，『教育時論』に岐棚生のペンネームで，理科の教材に関する記事の連載をはじめている。1899(明治 32) 年，高等師範学校訓導となり，附属小学校に勤務。これを機に，理科教授のみならず，「郷土」を基礎とした教授法，実科教授法の研究を活発に行い，『教育時論』『教育実験界』『教育会』『国民教育』などに発表し，著書『尋常小学に於ける実科教授法』も刊行した。

これまでの活動は，いずれも，小学校教育，とり

わけ，博物学教育や実科教授法に深くかかわるものであるが，1906（明治 39）年の異動は，棚橋の活動に大きな変化をもたらすこととなる。同年，東京高等師範学校附属東京教育博物館主事を兼務することとなったのである。博物館それ自体は着任以前から併設されており，棚橋もその施設に関して言及していたが，この時期以降，『教育研究』などにおいて，学校園，教育博物館に関する論考を重ねていった。たとえば，1906 年には，学校園に関する論考を複数発表し，また，『教育研究』に「教育博物館」と題する文章を執筆している。博物館活動への傾倒は，1909（明治 42）年 10 月から 2 年間にわたるドイツおよびアメリカへの留学を経てより顕著なものとなる。留学の目的は博物学研究であったが，博物館についての調査も積極的に行い，帰国後，その状況を報告するに至ったのである。欧米における理科教授・博物学教授・初等教育に関する報告を行うと同時に,『教育時論』に「通俗博物館」を発表した。

博物館への傾倒は，棚橋の活動の範囲が学校から社会へと拡大したこととも関係する。1914(大正 3) 年には東京教育博物館長事務取扱に, 1917（大正 6）年には東京教育博物館長に就任するが，ちょうど，文部省が通俗教育調査委員会を設け，社会教育政策の基盤整備を行おうとしていた時期に相当する。棚橋は，欧米での見聞を踏まえ，学校教育のみならず，社会教育の指針，生活改善運動にも関与するようになり，『教育時論』や『教育研究』だけでなく，中央報徳会の機関誌『斯民』にも文章を掲載するようになった。

1923（大正 12）年，関東大震災によって東京教育博物館全焼，翌年には，棚橋は，東京教育博物館および東京高等師範学校を退職した。しかしながら，学校教育（博物学，郷土教育），社会教育にかかわる棚橋の活動が停止したわけではない。1925（大正 14）年，文部省から社会教育調査，赤十字社から日本赤十字社参考館に関する調査，東京高等師範学校から欧州各国の博物教授調査，社会局から生活改善と勤倹奨励状況調査，東京市役所から直観教授並びに公園内民衆教育施設の視察など依頼をうけ，再びヨーロッパへと向かったのである。帰国後，棚橋は日本赤十字社を拠点として博物館活動に没頭した。日本赤十字社参考館（後の日本赤十字博物館）設立にかかわり，以後 20 年間，特別展の開催，館報の発行など日本赤十字博物館の活動を牽引した。さらに, 1928 (昭和 3) 年には, 博物館事業促進会 (後の日本博物館協会）の創設に尽力し，常任理事として機関誌『博物館研究』発行など会の運営にかかわってきた。つまり，棚橋は，この時期，日本の博物館界の中核にいたのである。『博物館研究』誌上に数多くの記事を掲載するだけではなく，博物館に関する執筆活動も盛んに行っている。郷土教育が再び勃興するなか，1928 年には『斯民』に「地方博物館問題」を，1930（昭和 5）年には視覚化する装置としての博物館の有用性を強調する『眼に訴へる教育機関』を, 1931(昭和 6)年には『教育研究』にスウェーデンの郷土博物館について報告し，『郷土』に「郷土博物館問題」発表，1932（昭和 7）年には『郷土博物館』を刀江書院より出版，1933（昭和 8）年には『公民教育』に「公民教育と郷土博物館」を発表するなど，郷土博物館に関する研究を精力的に発信し続けたのである。

前章で言及した郷土博物館建設に関する調査は，このような活動のある種のピークに位置付けられよう。ただし，郷土博物館建設ブームはその後途絶えることとなる。協会の関心が大東亜博物館設立に向かうなど，博物館をめぐる状況も戦時体制に組み込まれ，活動の縮小を余儀なくされたのである。

本研究で焦点を当てるのは，1945（昭和 20）年までの活動であるが，その後の棚橋の生涯についても簡単に述べておこう。1946 年，77 歳で赤十字博物館長を辞したのち，棚橋は，『博物館研究』の復刊に尽力する。その目標の一つは，日本における博物館の存立基盤を確固たるものとする博物館法制定である。「社会教育法の精神に基き，博物館の設定及び運営に関して必要な事項を定め，その健全な発達を図り，もつて国民の教育，学術及び文化の発展に寄与することを目的とする」博物館法が，制定されたのは 1951 年のことである。この枠組みは，戦後の博物館，特に，1960 年代から急増した地域博物館の根本を支えるものとなる。とはいえ，このような博物館の位置づけは，戦後新たに発想されたものではない。むしろ，教育との関係から棚橋が取り組み続けた郷土博物館などのあり様が，色濃く反映されているのである。

日本の博物館の法的基盤を整備すると同時に，棚橋は，1953 年から 1960 年 1 月まで，立教大学で博物館学を講じ，学芸員の育成にも尽力する。さらに，国際的な博物館界でも活躍し，1959 年には，国際博物館会議（International Council of Museums）の名誉会員となった。

1961 年 4 月 3 日，棚橋源太郎は 91 年の生涯を閉じたが，その後も，棚橋の理論・実践はその後も社会に大きな影響を与え続けている。I 章で言及したように，教育学や博物館学の分野を中心に，今の

なお，多くの研究者が棚橋源太郎に注目し，その思想や実践の検討を続けているのである。

Ⅳ　棚橋源太郎と「郷土」

棚橋はその長いキャリアの中で，「郷土」をどのように位置づけてきたのだろうか。1945（昭和 20）年までの活動を三つにわけて考えてみたい。すなわち，理科教育，実科教授法について力を注いだ時期―博物館との出会い以前の時期―，教育博物館に就任し西洋の博物館事情に接しその導入に勢力を注いだ時期，そして，赤十字博物館を拠点として日本における博物館の基盤整備に努めた時期である。

（1）理科教育，実科教育と「郷土」

棚橋源太郎は，近代教育制度の申し子といえる人物である。1872（明治 5）年，学制公布直後に小学校に入学，岐阜県尋常師範学校をへて教職の道をあゆみ始めた。ちょうど，郷土地理教育が制度化され，ペスタロッチ主義が小学校教育に導入された時期に，博物科の教員として歩み始めたのである。つまり，事物の直観的教授に重きを置く教育の継承者であり，それを当然の環境として実践してきた世代にあたる。

しかし，小学校教育をめぐる制度は目まぐるしく変化する。1900（明治 33）年, 法令改正にともなって，「郷土」の位置づけが教育現場やカリキュラムのなかで後退することとなった。このような重点の変化は，郷土教育を論じるなかでしばしば指摘されてきたことである。制度，法令の側面では，たしかに「郷土」は後景に移動したのである。従来の研究では，この停滞期をへて，昭和初期に「郷土」が教育現場で花開くとされてきた。しかしながら，棚橋の現場での実践はどうだったのだろうか。彼の活動を見ると, 以前同様, 否, それまで以上に熱心に,「郷土」を核とした教育実践を展開していたことが明らかになる。

例えば，彼は，理科教授法のみならず,「郷土」を基礎とした教授法，実科教授法の研究を活発に行い, 当時の教育実践に関する雑誌―『教育時論』『教育実験界』『教育会』『国民教育』など―にその成果, 論考を発表していく。彼が「郷土」について言及をはじめたのは，法令改正の翌年，1901(明治 34) 年のことである。『教育実験界』に「教授の基礎としての郷土」（棚橋 1901a,1901b）を発表し，また，著書『理科教授法』（棚橋 1901c）のなかでも，郷土科に関する章を設けた。それに続き，1902(明治 35) 年には,『国民教育』や『教育時論』に郷土科教授に関する論考を発表（棚橋 1902a,1902b,1902c,1902d,1902e,1902f), 1903（明治 36）年には集大成ともいえる『尋常小学に於ける実科教授法』（棚橋 1903）を刊行した。

当時の棚橋にとって,「郷土」とは何だったのだろうか。「教授の基礎としての郷土」(1901a,1901b) をみると，実科教授の出発点であり，その根底にはペスタロッチ主義の直観教授があること，さらに，ドイツにおける諸制度にも言及がなされ，また，東京高等師範学校附属小学校での実践報告が記されている。「郷土」は常に教授法のなかで位置づけられていたのである。さらに,「郷土科教授」(1902a,1902b) においては，郷土がいかなるものであるか，定義される。以下，特徴をのべると，（1）主観的にも客観的にも教授の基礎に適すること，（2）本国または全地球の一小模型であること，全地球を学ぶに必要なすべての材料があること，全体の縮影であること，これらの考え方が，ドイツ地理学によっていること[5]，（3）小単元であること，があげられる。重要なことは，普遍的な地球に関する科学的知識の教授のために,「郷土」が定義づけられているということである。

「地理教材の取扱方に就きて」(棚橋 1902g) においても，棚橋の郷土観が良く表れている。教授の一単元として郷土を扱うのであるが，それは，歴史的政治的区画なのではなく，土地構造上の自然的区画によって扱うべきであるというのである。ここに，これ以前の郷土の扱い方に対する棚橋の批判的なあり様を見出すこともできよう。つまり，1891(明治 24) 年，郷土の事物による直観教授が推奨されたとはいえ，実際には，政治的区画毎に編纂された書籍で郷土の事柄が教授されてきたことに対する批判である。

（2）近代的装置・博物館への関心―学校から社会へ

直観教授の一単元として郷土に向き合い，実践・提言を重ねてきた棚橋は，その後，博物館なる装置に出会う。1906(明治 39) 年，東京教育博物館主事を兼務することとなったのである。ただし，その年の講演記録を見ると，まだ, 棚橋は旧来の博物館像, すなわち,「蔵」としての博物館像を継承しているに過ぎず，その理解について急激な変化が見られるのは，1909(明治 42) 年から 2 年間のドイツ・アメ

リカ留学を経てからのことである。両国において，博物館が「世間化」され，学校教育においても盛んに利用されている様を目の当たりにした棚橋は，その後，自らの職務との関係からも，積極的に博物館についての論を展開していく。

なぜなら，当時，日本には博物館が建設されるようになってきたとはいえ，「いきいきした作用をしているものはほとんど皆無（棚橋 1919:17）」だったからである。ミュージアム・エクステンションと称して社会民衆の啓蒙や学校生徒の教育に積極的な活動を展開している博物館を，棚橋は，国民教育機関として期待したのである。それは，国際社会の中で日本が競争するためにも不可欠なものであるかのように，彼の眼にうつったようだ。

棚橋が求めた博物館は，あくまで，科学的思想の普及・啓蒙のためのものであり，歴史・美術を主とした帝室博物館とは異なるものであった。このような目的にかなう自然科学の博物館が国立や各都市に必要だと棚橋は主張したのである。

博物館への傾倒は，直観教授から連続するものであるが，しかしながら，この時期，彼の著作・講演から「郷土」という用語は姿を消すこととなる。このことは，彼の関心が，海外の博物館，社会教育の実現に移り，郷土やローカルな範域に関心を失ったということを，すぐさま示すわけではない。むしろ，啓蒙すべき対象として郷土に生きる民衆へと重点が移ったともいえる。

（3） 再び郷土へ―郷土博物館への関心

1925（大正 14）年，棚橋は再びヨーロッパに向かい，帰国後は，日本赤十字社参考館（後の日本赤十字博物館）と博物館事業促進会（後の日本博物館協会）を拠点に，日本の博物館界を牽引することとなる。日本赤十字博物館は，赤十字社の沿革・事業の広報という役割のほかに，広い意味で衛生にかかわる展示・啓蒙活動を行っていた。棚橋自身が振り返っているように，同博物館には潤沢な運営費があり，最新の展示設備を有しているほか，研究用に博物館学に関する外国図書や雑誌の購読も活発に行われていた。博物館事業促進会では，日本における博物館事業の中核を担うだけでなく，日本赤十字博物館の研究活動で得た海外の博物館事情など博物館学に関する最新の情報も，機関誌『博物館研究』を通して広く発信されていった。

注目すべきは，ここにきて，棚橋が再び郷土を重要視したことである。その理由として，大正末から昭和はじめの社会の状況があげられよう。関東大震災直後のこの時期，社会は急激な変化の時期を迎える。都市化が進展するのと並行して，農村における恐慌は深刻化するなかで，社会の再編成の時期を迎えたのである。棚橋のヨーロッパ留学の目的に，生活改善事業や社会教育に関する研究が挙げられていたことも，このような状況に深く関連する。このような社会の再編に不可欠な啓蒙装置として，博物館が位置づけられたのである。

また，教育界においても，この時期，再び郷土への関心が高まる。1930（昭和 5）年，郷土教育連盟が設立され，また，2 年間にわたって，各地の師範学校に郷土研究施設，すなわち，郷土室設置のための費用が交付されたのである。この施設が学校内に位置づけられたのに対して，より広い人々をターゲットにした郷土博物館の建設も増加した。

このような状況の下，棚橋は，郷土と博物館を結びつける形で持論を展開していく。たとえば，1931（昭和 6）年の「郷土教育の一考察」（棚橋 1931a）をみると，異なった空間的スケールで郷土の展示装置について言及していることがわかる。とりわけ，小学校区と結びつくような郷土室だけでなく，青少年，一般民衆のための郷土教育施設としての郷土博物館，また，外部者に対しても郷土を知らしめるような大都市における博物館など，学校教育の枠内ではなくより広い視野から郷土と博物館を考察していたのである。このことは，「公民教育と郷土博物館」（棚橋 1933）においても明白に述べられている。「公民として郷土人として必要な教養を与えること」を「郷土＋博物館」，すなわち，棚橋のいう郷土博物館の主な任務と位置づけたのである。その際，「郷土」に特別な意味が付与されていることは等閑視すべきではない。具体的にどのような範域であるか明言されないが，「社会の一員」として属するところを郷土とし，その存在をよく理解することを通して「社会連帯の観念を啓発」するというのである。そのためには，「郷土の美点ばかりでなく，その端緒までも指摘して，郷土の真相を認識させ，郷土の一員としてこれが改造或は向上発展に，努力せんとする責任感を起さ」せることが必要だと説いている。

1900 年頃より，棚橋が積極的に推し進めてきた―しかも，制度上は後退したにもかかわらず推し進めてきた―郷土の位置づけを想起していただきたい。理科教育，実科教育において郷土を全地球の一模型と位置づけた考え方は，この時期，まったく強調されることはない。客観的な世界や自然界の把握

というニュアンスは，この時期の郷土と博物館の接合において，「社会の一員としての責任」の影に隠れて，大きく後退しているようにみえる。

棚橋の郷土博物館論の集大成ともいうべき著作『郷土博物館』(1932) をみてみよう。理科教育や実科教育において郷土なるものを強調したときと同様，ヨーロッパ諸国やアメリカの例を紹介しながら，郷土概念を再確認している。「一定の土地地域を基礎としていること」さらに「成長発達につれて関係する地域が拡大すること (棚橋 1932:14)」という指摘には，直観教授の一環として「郷土」を重要視したときの位置づけの名残を見出すこともできよう。しかしながら，「強い郷土感郷土的感情が根幹 (棚橋 1932:13)」にあるというように感情的なつながりを強調している点，また，全地球の一模型ではなく祖国，国家に郷土を関連付けている点は，この時代の思想の特徴を色濃く反映しているのである。

このような社会の潮流は，その後，ますます，愛国心と連続したものとして愛郷土精神の要請を位置づけ，その核として郷土博物館の必要性を説く方向へと進んでいき，ついに 1940 年前後，戦前における郷土博物館の全盛期を迎えるに至ったのである。

以上，三つの時期にわけて棚橋の郷土観について明らかにしてきた。個々の時期の特徴ついては先述のとおりであるが，章のおわりに次の点を提示しておきたい。

第一に，「郷土」の実践は，社会的状況の影響を受けたものである一方で，法令や一般的に郷土教育について語られてきた定説―愛国心との連続性―と必ずしも完全に一致するものではない，ということである。時代の思想潮流に合致しながらも，常に，科学的な知識の教育・普及という点から，郷土を重視していたことが見え隠れするのである。

第二に，郷土教育の根底にあった直観教育も，また，博物館という近代的な装置の導入についても，グローバルな潮流のなかで考えるべき必要がある。すなわち，ローカルな「郷土」に焦点を当てているが，それは，時にはナショナルな，そして，時には，グローバルな知的潮流との関係のなかで，実践されているのである。このことは，ローカルなるものを考えるうえで肝要なことである。

V　博物館における郷土の具体化

棚橋の二つの関心，郷土と博物館は郷土博物館という形で結実することとなるのであるが，実のところ，彼自身の手によって作り上げられ育てられた郷土博物館はない。日本博物館協会の活動を通して，博物館や博物館論についての論考を重ね，郷土博物館のあるべき姿を探っていくと同時に，赤十字博物館の運営の中で，展示空間という表現を深化させていったというのが，適当であろう。ここでは，博物館において郷土なるものをどのように具体化しようとしていたのか，『郷土博物館』(棚橋 1932)，『眼に訴へる教育機関』(棚橋 1930)，および，『博物館研究』に掲載された文章をもとに，内容と技術の両側面から考察する。

(1) 博物館で展示する郷土

棚橋は，郷土という名称を「収容される陳列品や研究資料が，悉く郷土関係の物ばかりであると云ふことから来たもの（棚橋 1932:13)」と説明する。ここでいう郷土とはどのような範囲を示すのであろうか。郷土愛を祖国愛と直結させる当時の風潮にしたがい，その範囲は，祖国にも拡大されるものなのであろうか。棚橋は，このような可能性も否定するわけではないが，しかしながら，郷土とは，一般的には，「少年時代に居住し，成長した土地を中心にして，屢々来往した郡府県までぐらゐの地域内に於ける自然的環境との接触並に社会的生活に於て，受けた幾多の刺激体験から成り立つたもので，深く脳裡に固着して，終生忘れることができない (棚橋 1932:14)」ものだと主張する。つまり，限定的なローカルなものだというわけである。ただし，その範囲は一定のものではない。前章で述べたように，「成長発達に連れて，その関係する地域が漸次拡大されて往くもの」であり，郷土博物館が扱う「郷土」も様々な空間スケールのものを含むこととなる。

このような伸縮可能な郷土の位置づけから，棚橋は，郷土博物館を大きく二つにわけて考えている。一つは，比較的狭い町村を対象とした郷土博物館である。本来的な意味での「郷土博物館」(home museum, Heimatmuseum) ということになろうが，英独の village museum, rural museum, Ortmuseum などが含まれる。もう一つは，より広い都市を対象としたもの，郡府県を対象としたもので，city museum, Stadtmuseum, provincial museum, Landesmuseum が該当する。名称や関

係地域に違いがあっても，いずれも郷土博物館であるという位置づけである。

当然, このような行政区画によるものだけでなく，歴史的背景，自然条件，社会経済的状況に基づく郷土の範囲も，想定されているのであるが，具体的な配置という点から，特に，前記のような区分が重視されることとなる。『郷土博物館建設に関する調査』（日本博物館協会 1942）では，行政区画による位置づけを発展させ，望ましい配置について提案がなされている。

最も狭い範囲に設置されるのは，かつて学校内に設けられた郷土資料室に類するものである。ただし，この場合，社会教育に利用に適したものとはいえないし，また，各校の施設を充実させるのも経済的に困難である。したがって，複数の町村，あるいは小都市に学校教育を補完し，また，社会教育にも資することのできる施設を設置する必要があるという。具体的には，小都市，あるいは，町村の郷土博物館の場合，人口 1 万程度の小都市に建設することが推奨される。多くの場合，郡内に 2，3 か所，経済および文化の中心地で交通の便の良いところに設置されることとなる。より広い範囲では，県庁所在地のように人口数万以上の中都市を対象とした郷土博物館があげられる。このような小都市，あるいは，中都市を対象とした博物館は，立地する市や町だけを扱うのではなく，そこを中心とする一定地域について取り扱う必要があるという。さらに，大都市にもニューヨークやパリ同様，独立した博物館，すなわち，国家の中央博物館とは異なる博物館を設置することを提案している。

以上のように様々なスケールで展開される郷土博物館―名称にこだわらず―では，どのような郷土に関する内容が展示されるのであろうか。棚橋は，まず，普通博物館と特殊博物館，もしくは，専門博物館の 2 種類に分け，郷土博物館の本質は前者にあるとしている。つまり，諸分野の資料を網羅する普通博物館が郷土博物館の本質だというのである。そこには，歴史考古学的資料と同時に，地理や動植物など自然史にかかわる資料も集められるべきであり，また，その地域の過去だけでなく現在の姿などを知らしめる資料も含む（棚橋 1941:3）。過去を物語る資料の例として，次のような資料をあげている。

> 地域内土地の変遷図，石器，土器，埴輪等の発掘品，地方開拓功労者又は有名な領主，代官，名主等の肖像遺品，著名な学者，芸術家の肖像遺品作品，地方特有の工芸品，昔の防炎防火用器具，貨幣，運搬具，建築，家具調度，台所用具，食器，被服，甲冑武具，乗物，玩具其他の風俗資料，郷土の変遷を記述したる書籍，古文書絵画類

一方，現在を示す資料として列挙しているのは以下のとおりである。

> 地域内の地図，地理模型，気象図，地質及土性図，地盤構成の岩石鉱物土壌の標本，地方産の動植物標本，地域内の人口生態，土地の利用交通経済等に関する統計図，地方特有の農耕水産業具原料及生産品見本，地方の衛生状態を示す図表，保健衛生家事育児等に関する参考資料

これら資料は均等に蒐集・展示されるのではなく，取り扱う地域の特徴に応じて選択されるのである。

郷土博物館が扱う地理的領域および内容に関して，棚橋が紙面を割いて取り上げるのが，ドイツのアルトナ博物館 (Altonaer Museum) である。『郷土博物館』(1932) においても，中都市の郷土博物館の代表的事例として，51-58 頁にかけて紹介している [6]。アルトナ博物館は現ハンブルク市に 1900 年に設立された博物館である [7]。棚橋は，基本的にはアルトナ博物館をシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州の地学の博物館と位置付けているが，一方で，当時のアルトナの主産業深海漁業に関連した各種産業について取り扱っていることにも注目している。棚橋の説明にしたがうと，北海およびエルベ川における漁業に関する展示を行う「漁業室」，淡水魚を中心とした「水族館」，州内の土壌学・地質学資料を断面見本などの展示を通して「面白く (1932:56)」展示した「地質室」，歴史や産業に関する文化史的資料を模型だけでなく実物大で再現して展示する「民族室（文化史室）」というのが，その展示内容である。すなわち，アルトナを中心としたより広い地域の人文・自然両側面を取り扱いながら，特徴ある産業に焦点をあてる，という棚橋が提唱する郷土展示の典型を見出すことができるのである。アルトナ博物館では，当時，ドイツにおける郷土博物館論を牽引する人物と目されるオットー・レーマン (Otto Lehmann) が館長を務めており，棚橋は，レーマンが 1930 年に英国博物館協会総会で講演した郷土博物館論を紹介している (1932:61-73)。郷土博物館に関する理論・実践の両側面において，理想とすべき博物館と位置付けていたのであろう。

アルトナ博物館など海外の博物館が郷土博物館の

代表例にあげられるのに対して，日本には，いくつかの例外を除き「模範的代表的施設 (1932: 139)」として紹介すべき郷土博物館がないとことわる。その一つが，香川県坂出にある鎌田共済会郷土博物館である。鎌田共済会によって 1922（大正 11）年に開館した同博物館では，鉄筋コンクリート 2 階建ての近代的な建物に香川県下に関する資料が収集されており，現在も一般に公開されている。継続的な調査に基づき，香川県内の物産，考古資料，歴史資料，自然標本が収蔵・展示されており，特に，塩田開拓者・久米栄左衛門に関する資料（測量や土木事業に関する資料含む）が，郷土の特徴を示す（棚橋 1931）。アルトナ博物館を代表的郷土博物館と考えると，博物館の位置する町・都市のみならず周辺地域に関する資料に加え，その土地・博物館を特徴づける展示がなされているという点において，鎌田共済会博物館は紹介するに値すると判断されたのであろう。

（2）郷土の表現方法

郷土が博物館という空間の中でどのように表現されたのか。ここでは，博物館全体という空間，展示室という空間の双方において考える。具体的には，郷土という内容からいったん離れ，当時最新の博物館空間がいかなるものであったのか論じていく。

棚橋の博物館論の特徴の一つは，物を収蔵する「蔵」とみなすような旧来の考え方から脱皮しようという点にある。前章でも述べたとおり，ヨーロッパやアメリカの博物館に接した棚橋は，日本の現況を批判的にとらえ，学校教育のみならず，一般民衆を対象とした有効な教育機関として機能する博物館を望んだのである。「眼に訴える教育機関」としての博物館機能を，高く評価したのである。そのような考え方に基づき，博物館という空間はどのように配置されたのだろうか。

まず，博物館全体の配置について注目したい。棚橋は，博物館の機能として，学術研究のほかに，学校教育の補助的役割，さらに，社会教育をあげている（棚橋 1932）。常設展示や特別展示だけでなく，資料の貸し出し，講演会や講習会など，多岐にわたる活動が，博物館には必要なのである。このような博物館像を論じる際に，棚橋はアメリカにおける実践にしばしば言及する。ブルックリン・チルドレンズ・ミュージアム (Brooklyn Children's Museum) や，ニューアーク博物館 (Newark Museum[8]) などはその例である。また，自らが運営にかかわった日本赤十字博物館においても，棚橋は，このような博物館像を追求し，実践してきた[9]。

これら多岐にわたる活動の基盤となる博物館という空間は，いかなるものであったのか。『郷土博物館』や『郷土博物館建設に関する調査』には，具体的なフロア配置が掲載されている。例えば，ローレンス・ヴェイル・コールマンの *Manual for Small Museums*[10] (Coleman1927) に言及しながら，小規模博物館のための設計図が提案されている。陳列室や収蔵室だけでなく，図書室や教室，講演室が設けられている。このような空間は前述の博物館活動を維持するために必要不可欠なものなのである。

次に，「郷土」など具体的な内容が表現されるべき展示室という空間について検討する。特に，当時，最新の理論・技術として取り入れられていた展示技術に焦点を当てる。このような最新の技術は，棚橋自身が日本赤十字博物館に導入していたものであり，また，『眼に訴へる教育機関』（棚橋 1930）などの著作において，その効果を論じているものである。

技術的側面について，棚橋は，「陳列ケース」や展示台，および，「説明札」，すなわち，ラベルについて，詳細な論を展開している。前者，ケースや台については，*Manual for Small Museums* やアメリカの例に依拠しつつ，最新の展示施設においてどのようなケースが用いられているのか，それらは，どのように「陳列室」に配置されるべきか，説明がなされる (棚橋 1930:282-299)。陳列替が可能なようにケースは作りつけにしないことを前提とし,「縦ケース」と「横ケース」,「センターケース」と「ウォールケース」,「テーブルケース」という具合に，ケースを大別し，それらの望ましい形について，アメリカの博物館例を図版で示しながら，提示している。このような最新の設備は，棚橋が関わる日本赤十字博物館においても導入されているが，「（米国の）ライブラリー・ビウロウの金属ケースは，本邦では三井物産株式会社の機械部で，一手で輸入して居る」（棚橋 1930:293）とあるように，いずれも，アメリカから取り寄せなければいけないものである。『博物館研究』6 巻 3 号（1933 年）掲載の広告を見ると，納品先として挙げられているのは，日本赤十字参考館，東京科学博物館，農林省水産試験場，帝室博物館，朝鮮総督府陳列館，三越呉服店，阪急百貨店など，いずれも大規模な博物館・展示施設や百貨店であり，多くの郷土博物館にとっては，実現不可能な設備であったことも，容易に想像できる。

また, 展示に欠かせない「説明札」についても,「陳

列法の一部」（棚橋 1930:313）とみなし，その形状や内容，配置について，英米の例をあげながら詳細に説明がなされる。内容の点では，「箇別的説明札」と「総括的説明札」に大別され，それらは，来館者にわかりやすく，かつ，興味をひくように作成されるべきだという。つまり，資料や作品それ自体を陳列すれば事足りる，というのではなく，系統的に何事かと提示するような展示に，効果的な「説明札」の使用は欠かせないのである。

いかに見せるか，ということに対して最新の技術を持って工夫がなされるのと同時に，表現方法についても注意がはらわれる。第一に，資料の配列に焦点があてられる。とりわけ，その順序に留意し資料をグルーピングして配列することの重要性，さらには，「組合わせ陳列」導入の有効性が強調されている（棚橋 1930:264-279)。「組合わせ陳列」，あるいは，「グループエキスヒビション[11]」とは，「互に関係のある若干の標本若くは模型を，自然の有りの儘の状態に配合して陳列する」ことであり，そのうち「最も進歩したものは舞台装置の一種で，特殊の照明法を施したケース内に陳列をして，見物人は窓を通じて見るやうになつて居る（棚橋 1930:264)」。それは，「ヂオラマ式陳列」とも称されるものである。

「組合せ生態陳列近時の発達」（棚橋 1931b）で紹介されるのは，ニューヨーク市にあるアメリカ自然史博物館である[12]。「アフリカ館」の陳列を例に，現地でどのような調査が行われ，標本だけでなく背景に至るまでどのように再現されていくのか，説明がなされている。このように，「ヂオラマ式陳列」は科学・自然史にかかわる展示において用いられてきたものであるが，棚橋は，歴史の再現についてもこの方法の有用性を説いている。スウェーデンのスカンセンのように実際の建造物を屋外に展示することによって，文化史的展示を行うこともできるが，一方では，実物大，あるいは縮小した模型で歴史的出来事や人々の生活の一断面を示すことも推奨されたのである。空間を再現する技術が日本の博物館にも導入されようとしたのである。当時，すでに，事物それ自体が展示室という空間に置かれるだけでなく，空間的表現が積極的に試行されたのである。

Ⅵ　おわりに

本研究の目的は，近代日本における地理的思想である郷土と博物館という装置の接合について，棚橋源太郎の理論・実践に焦点をあて，探求することにあった。棚橋という人物について解説した後に，Ⅳ章では，棚橋がいかに郷土を定義づけていたか，思想という視点からアプローチした。それを踏まえ，Ⅴ章では，まず，郷土が博物館においてどのように具体化されたのか，博物館そのものの配置とその内部における展示内容を例に論じた。郷土の表象としての側面に着目したのである。さらに，直前の節では，郷土を展示しようとした博物館について，技術的側面から検討を行った。実際，棚橋自身が郷土の展示を完成させることはなかったのであるが，表現手法として当時どのような技術や装置を利用していたのか明らかにした。すなわち，表象された内容やメッセージではなく，人と事物とのインターフェイスの側面について考察を試みたのである。

残念ながら，Ⅱ章（２）の考え方に派生する部分については，充分な探求がなされたとはいえない。そもそも，現実の展示空間やそこで身体を介してなされる経験，そしてそれに伴う情動を，活字化された資料から引き出し熟考することは可能なのだろうか。もちろん，棚橋源太郎が生きた時代にタイムスリップできない以上，困難は伴うものである。しかしながら，博物館というメディアは表象を超えたものとして探求されるべきものである。本稿で試みたように，意味・表象・物質性すべての側面から解き明かして博物館というメディアのあり様が見えてくるものであり，そのためには，どの部分も欠くことはできないのである。

一方，本稿を地理思想研究の一端として考えると，今後は，ますます，棚橋源太郎のように地理学者でもなく地理教育者でもなく，また，どの分野においてもアカデミックな研究者でもない者の実践が注目されていくこととなろう。地理学的知は学問のなかでのみ形成されるものではなく，また，狭い意味での地理教育のなかで教授されていくものでもない。学校教育のみならず，棚橋が生涯取り組んだ博物館など，人々との接点となる領域でこそ，地理的想像力が力を発揮してきたのである。

注

1) とりわけ，生誕地である岐阜県では棚橋の人と実践を記録し顕彰する動きが強い。例えば，「棚橋源太郎先生顕彰・研究会」が設立され，1991 年から 1992 年にかけて，機関誌『棚橋源太郎研究』が発行され，また，1992 年には，岐阜県博物館友の会から『棚橋源太郎：博物館にかけた

生涯』（宮崎 1992）が出版されている。また，棚橋源太郎に関する資料は，岐阜県博物館のほか，国立科学博物館にも所蔵されている (斎藤・鈴木 1998)。

2) 1851-1925 年。ウェールズの教育者で，1884 年から 1899 年までケンブリッジ大学の初代女子師範部長を務めた。1901 年来日。英文学研究者の本田増次郎と棚橋が講義録をまとめた。

3) 筆者が実際にそのような議論や実践の場に居合わせたことは数少ないが, 2009 年 7 月ロンドンで開催された「ヴィジュアリティ／マテリアリティ (Visuality/Materiality)」と題する学際的会議は，このような方向性を色濃く示すものであった。オーガナイザーは，共に地理学研究者のジリアン・ローズとディヴィア・トリア＝ケリーである。発表されたテーマや表現方法は多岐にわたるものであったが，いずれも，表象を超えた視覚芸術のあり様にアプローチしようとするものであり，その中には，博物館という表現・実践を対象としたものもあった。

4) 棚橋の生涯については，棚橋源太郎先生顕彰・研究会によって発行された『棚橋源太郎研究 (1-7)』（1991-1992 年），および，宮崎 (1992) によった。また，数多くの著作を列挙しているが，次章以下で引用・参照する際に，文献情報の詳細を明記している。

5) 「郷土は本国又は全地球の一小模型たるに過ぎらればなり，カール，リッテルは曰く『如何なる郷土にも全地球を学ぶに必要なる総ての材料在り』とアレキサンドル，フンボルト又曰く『自然は地球の各隅に於て全体の縮影なり』と，故に郷土地理教授の目的は郷土の山川に精通せしめんが為にあらずして，寧ろ遠隔地の地理地球の表面を理解せしめんが為めの準備として在ることを知るべし（棚橋 1902a:13)」と，リッターやフンボルトへの言及もなされている。

6) 『博物館研究』3(3),1930 年でも取り上げられている。

7) 芸術と文化史の博物館として公開されているアルトナ博物館の現況については，以下を参照のこと。http://www.altonaermuseum.de/（2010 年 5 月 28 日検索）

8) ニューアーク博物館では，20 世紀前半のアメリカ博物館界の展望，公共図書館の展望を語る上で欠かすことのできない人物ジョン・コトン・デイナ (John Cotton Dana) が活躍していた。デイナについては，たとえば水谷（2002）の研究も参照のこと。

9) 『日本赤十字社参考館報』(1927-1932),『日本赤十字博物館報』(1933-1944) にはその年に行った展覧会の詳細が記されている。

10) 本書は 20 世紀初頭のアメリカ博物館界における代表的な博物館論の一つである。筆者も，20 世紀初頭シラキュース市のオノンダガ歴史協会の展示資料目録を分析する際に，本書に言及した（福田 2002,2003)。

11) 棚橋の表現のまま。

12) アメリカ自然史博物館のジオラマについては，拙稿でも論じている（福田 2005)。

参考文献

生島美和 2006. 棚橋源太郎の郷土博物館論の現代的意義―地域博物館論の基盤としての位置づけ．教育学論集（筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻）2: 43-62.

石田文彦・小出義彦 1998a. 棚橋源太郎と手工教育―手工科教授書』の執筆分担と手工教育史上における評価―. 日本産業技術教育学会誌 40(3): 131-137.

石田文彦・小出義彦 1998b. 棚橋源太郎と手工教育―棚橋の手工教育理論―.日本産業技術教育学会誌 40(4): 189-194.

石田文彦・小出義彦 1999. 棚橋源太郎と手工教育―棚橋が手工教育に傾斜した背景―. 日本産業技術教育学会誌 41(1): 1-7.

泉谷 洋平2003. 人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論―英語圏における理論的論争をめぐって―. 空間・社会・地理思想8:2-22.

伊藤純郎1998.『郷土教育運動の研究』思文閣出版.

伊藤寿朗監修 1990-1991. 『博物館基本文献集（21巻＋別巻）』青空社.

岩崎紀子 2000.棚橋源太郎の「郷土」観に見る初等理科教授の構想についての考察―東京高師附小における理科教授法の理論的構築．京都大学大学院教育学研究科紀要46: 374-385.

内川隆志1990.郷土教育の変遷Ⅰ―明治～昭和初期の郷土教育．國學院大學博物館学紀要15: 54-65.

内川隆志 1994.郷土教育の変遷Ⅱ―昭和初期の郷土教育と博物館―．國學院大學博物館学紀要19: 1-10.

内川隆志 2004. E.P.ヒュース嬢と棚橋源太郎. 博物館学雑誌 29(2): 63-74.

内山大介 2007. 博物館における「郷土」・「地域」とその展示―「総合」という視角の系譜．歴史民俗資料学研究（神奈川大学）12: 49-63.

金子淳 2001. 『博物館の政治学』青弓社.

木村健一郎2000.郷土科教育の揺籃期―棚橋源太郎の「実科教授論」をめぐって．通信教育部論集（創価大学通信教育部学会）3: 73-86.

「郷土」研究会 2003. 『郷土―表象と実践』嵯峨野書院.

小出義彦・石田文彦 1998. 棚橋源太郎と手工教育―棚橋の手工教育における活動―. 日本産業技術教育学会誌 40(2): 71-79.

斎藤修啓 1998. 1890年代における棚橋源太郎による西欧博物館論の受容―博物館の教育活動と学校教育の関係に注目して. 日本の教育史学41: 25-41.

斉藤修啓・鈴木一義1998. 棚橋源太郎資料について―棚橋資料目録. Bulletin of the National Science Museum. Series E, Physical Sciences & Engineering21: 9-57.

佐藤優香1998.教育博物館における教育機能の拡張―手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容. 博物館学雑誌 23(2): 51-64.

佐藤優香 2009. 棚橋源太郎の教育思想と博物館経営. 博物館学雑誌 34(2): 23-42.

椎名仙卓 1978. 明治後半期に於ける博物館設置・運営論―

田中芳男・箕作佳吉・棚橋源太郎の構造 ―. 博物館研究 13(8/9): 3-9.
椎名仙卓 1981. 大正時代の特別展覧会―棚橋源太郎の構想とその社会への波及―. 博物館研究 16(2): 3-14.
椎名仙卓 1989. 『明治博物館事始め』思文閣出版.
島津俊之2010. 郷土概念と初等地理教育の偶有的接合―明治19年「小学校ノ学科及其程度」をめぐって―. 空間・社会・地理思想13: 19-37.
棚橋源太郎 1901a. 教授の基礎としての郷土. 教育実験界7(12):3-8.
棚橋源太郎 1901b. 教授の基礎としての郷土（承前）. 教育実験界8(1)3-9.
棚橋源太郎 1901c.『理科教授法』金港堂.
棚橋源太郎 1902a. 郷土科教授. 国民教育3:13-15.
棚橋源太郎 1902b. 郷土科教授（承前）. 国民教育4:17-20.
棚橋源太郎 1902c. 尋常小学校に於ける実科教授（上）. 教育時論622:8-10.
棚橋源太郎 1902d. 尋常小学校に於ける実科教授（中）. 教育時論623:10-13.
棚橋源太郎 1902e. 尋常小学校に於ける実科教授（下）. 教育時論628:11-13.
棚橋源太郎 1902f. 尋常小学校に於ける実科教授（下の続き）. 教育時論629:14-16.
棚橋源太郎 1902g. 地理教材の取扱方に就きて. 教育界1(10): 34-40.
棚橋源太郎 1903. 『尋常小学に於ける実科教授法 全』金港堂.
棚橋源太郎 1919. 本邦社会教育の不振. 教育時論1214:16-18.
棚橋源太郎 1930. 『眼に訴へる教育機関』宝文館.
棚橋源太郎 1931a. 郷土教育の一考察. 教育研究367:37-43.
棚橋源太郎 1931b. 組合せ生態陳列近時の発達. 博物館研究4(1):1-2.
棚橋源太郎 1932.『郷土博物館』刀江書院.
棚橋源太郎 1933. 公民教育と郷土博物館. 公民教育3(8).20-22
棚橋源太郎 1941. 郷土博物館の諸問題. 博物館研究14(12)2-4.
日本博物館協会 1942. 『郷土博物館建設に関する調査』日本博物館協会.
橋本裕之 1998. 物質文化の劇場－博物館におけるインターラクティヴ・ミスコミュニケーション－. 民族学研究62(4):537-562.
福井庸子2004. 棚橋源太郎の博物館教育論の形成過程. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要12(1): 89-97.
福井庸子 2006a. 戦前における社会教育機関としての博物館の昨日と学芸員の専門性―棚橋源太郎の博物館教育観を中心に. アジア文化研究13: 15-26.
福井庸子 2006b. 東京教育博物館「特別展覧会」に関する考察―社会教育体制移行の過程に注目して. 文化資源学5: 43-51.
福井庸子 2007. 大正期における博物館教育活動に関する研究―東京教育博物館の特別展覧会を中心に. 早稲田教育評論21(1): 51-63.
福田珠己 1997: 地域を展示する―地理学における地域博物館論の展開―. 人文地理, 49(5), pp.442-464.
福田珠己 2002. 博物館資料目録のもう一つの読み方. 徳島博物館研究会編『地域に生きる博物館』204-224, 教育出版センター.
福田珠己 2003. 地域展示と「私たち」の生成. 「郷土」研究会編『郷土：表象と実践』68-86,嵯峨野書院.
福田珠己 2005. ディオラマと地理的想像力. 大阪府立大学紀要（人文・社会科学）53: 37-52.
福田珠己 2010. 人文地理学と博物館との接点を求めて. 地理55(10):39-44.
福田ふみ 2007. こども博物館について-棚橋源太郎と木場一夫の論を参考に―. 國學院大學博物館學紀要 32: 41-48.
水谷長志 2002. ジョン・コトン・デイナのニュー・ミュージアム―書誌学的覚え書き―. 東京国立近代美術館紀要 7: 45-66.
宮崎惇 1992. 『棚橋源太郎―博物館にかけた生涯』岐阜県博物館友の会.
宮脇一利 1996. 生態学プランとしての棚橋源太郎の博物教授について. 教授学の探究 13:77-86.
森正人 2009. 言葉と物：英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開. 人文地理 61(1): 1-22.
Anderson,B. and Harrison,P. eds. 2010. *Taking-place: non-representational theories and geography*. Routledge.
Coleman, L.V. 1927. *Manual for small museums*. G. P. Putnam's Sons (New York).
Crang, M. 1996. Magic kingdom or a quixotic quest for authenticity? *Annals of Tourism Research* 23:415-431.
Katriel, T. 1997. *Performing the past: a study of Israeli Settlement Museums*. Lawrence Erlbaum Associates.
Macdnald, S. and Fyfe, G. eds. 1996. *Theorizing museums: representing identity and diversity in a changing world*. Blackwell.
Macdonald, S. 1997. The museum as mirror: ethnographic reflections, in James, A., Hockey, J. and Dawson, A. eds.. *After writing culture: epistemology and praxis in contemporary anthropology*, Routledge, 161-176.
Nesbitt,C. and Tolia-Kelly, D. 2009. Hadrian's Wall: embodied archaeologies of the linear monument. *Journal of Social Archaeology* 9:368-390.
Snow, S. E. 1993. *Performing the pilgrims: a study of ethnohistorical role-playing at Plimoth Plantation*. University Press of Mississippi.
Thrift,N. 2007. *Non-representational theory: space/politics/affect*, Routledge,
Witcher, R. Tolia-Kelly, D., and Hingley, R. 2010. Archaeologies of landscape: excavating the materialities of Hadrian's Wall. *Journal of Material Culture* 15: 105-128.

付記

2007～2009年度科学研究費補助金研究成果報告書『地理思想および社会思想としての「郷土」に関する研究』（研究代表者：大城直樹，2010年3月発行）に掲載した「博物館に御おける「郷土」の具体化―棚橋源太郎の理論・実践を中心に―」を加筆・修正したものである。また，Ⅲ，Ⅳ章の内容については，日本地理学会2009年春季学術大会（帝京大学），および，2009年に開催された14th International Conference for Historical Geographers（京都大学）で，Ⅴ章を中心とした内容については，2010年International Geographical Union: Regional Conference（Tel Aviv）で発表した。